

特集

いざ行かん！ 真の意志決定支援の道！！

「当事業所では、意志決定支援をしています。」……本当にできているのでしょうか？
今回は、「真の意志決定支援」と「見せかけ上の意志決定支援」について考えたいと思います。

事例 就労継続支援B型に通所するAさん(男性、自閉傾向)

▶ Aさんの食事についてのアセスメント「残さず食べる人」▶ある日「親子丼の鶏肉を残した」

支援員 1



支援員 「どうして残すの？今まで食べていたでしょ」
 本人 「……」
 支援員 「残してもいいけど、残すと鶏さんに怒られるよ!」
 本人 「鶏さん怒る?」
 支援員 「鶏さん怒るよ。」
 本人 「鶏さん怒る?」
 支援員 「鶏さんに怒られるから食べなきゃダメだよ。」
 本人 「鶏さん怒るね。」食べた。
 支援員 「やっぱり食べれるじゃない。」

支援員 2



支援員 「いつもは食べれていたのに、残したんだね。どうしたのかな?」
 本人 「……」
 支援員 「おなか痛い?」
 本人 「痛くない!」
 支援員 「まずかったかな?」
 本人 「まずくない!」
 支援員 「今日は、食べたくなかったんだね。これからも、残したいときは残していいですよ。」
 本人 「……」

支援のその後は？

本人 食事場面以外でも「鶏さん怒る?」やパニックを起こす場面が頻繁になった。
 支援員 その都度「鶏さん怒るよ」「なんで怒ってるの」
 本人 イライラすることが多くなる。
 支援員 に対して手を出すことも!
 支援員 「なんで怒るの!」注意。
 本人 増々イライラ!パニックも頻繁に。

本人 嫌いなものが次々に発覚。「嫌いだからね、残すよ～」
 支援員 「嫌いなものもずっと無理して食べてきたんだね、つらかったね。」と共感。
 本人 「つらかったよ。」
 母親にこのことを伝えると、嫌いなものがあつたなんて知らなかったとのこと。事業所と共通支援スタート。全体的にイライラがなくなり落ち着いてきた。

▶ その前に・・・ “意志決定支援とは？”・・・支援員の皆さん、答えられますか？

意思決定支援

「生活のあらゆる場面で、本人の意思が最大限に反映された選択を支援すること」

意志形成支援

障がい者本人の意思がつくられるために、理解できる形での情報提供と経験や体験の機会を提供する支援

意志表出支援

形成された意志を、選択場面や決定場面で言葉だけでなく様々な形で表出されるのを汲み取る支援

“意思決定支援”を理解したうえで……

2人の支援員の支援を振り返って見ましょう!

支援員1

①「残してもいいけど」

「残してもいい」と「けど」の2句に分けられる。

残してもいいと、一見意志決定の選択を与えていると見せかけてけどで、否定している。

結果的に、ご本人の意思決定「残したい」を否定している言葉がけになっていることに気づけていただけたでしょうか？



②「鶏さんに怒られるよ。」

小さなころ、親から「そんなことをすると〇〇に怒られるよ。」と言われた経験のある人は多いと思う。でも、鶏肉を残したからと言って鶏が怒るなんてありえないことで、なんとなくニュアンスで「残さず食べなさい」の意味だと受け取っている。こういうあいまいな表現は自閉症などの障がいのある方には理解不可能で、結局「残すと怒られる」だけを学び取ることになる。

理解できる形での情報提供にはほど遠い支援であることに、気づけていただけたでしょうか？

③「何で怒ってるの」

残したい鶏肉を残せないジレンマで、ご本人が様々な形で意思決定を表出しているんですよ。

怒るというご本人の行動から、ご本人の意志を考えたり想像したりせず、支援員も怒っています。

選択場面や決定場面で、言葉だけでなく様々な形で表出されるのを汲み取る支援には、ほど遠い支援をしていることに気づけていただけたでしょうか？

支援員2

①「どうしたのかな?」「食べなくなっただね。」

ご本人の行動に寄り添い、気持ちを代弁しています。

「残したいときは残していいんですよ。」とご本人の行動も肯定しています。

ご本人はここで、残しても怒られない、残してもいいんだということを学びます。

その上で、嫌いなものは残すという意思決定ができるようになりました。

②「無理して食べてきたんだね、つらかったね。」

ご本人の思いに共感し、意志の表出を汲み取っています。



支援員1の支援では、一見「残してもいい」と真の意志決定支援が図られているように見えますが、実は「残してもいいけど」と、支援員側の思い通りにご本人が動いてくれるよう仕向けている支援「見せかけ上の意志決定支援」をしていることに気づいていただけましたでしょうか？

支援員2の支援では、ご本人の気持ちや行動に寄り添い、それを肯定しています。意思が形成され、意志表出もいい感じができるようになり、意志決定支援が図られています。

「真の意志決定支援」と「見せかけ上の意志決定支援」について、貴方の事業所でも支援員の皆さんで再度話し合う機会になれば！と願っています。

長野県知的障がい福祉協会会長 宮下 智（明星学園）

【行動とその意味するもの～食べる①～】

では今回は、食べるということに注目して、食堂場面の観察力について考えていきましょう。

Aさんは、比較的自立が進んでいる人です。身の回りのことはほとんどでき、話すこともできます。私たちには、このような方を相手にした時にどうしても陥りやすい欠点があります。それはその人の言動の全てを丸ごと正しいと信じてしまう傾向があることです。流暢にしゃべることができるばかりに、その言葉を信じてしまうのです。

Aさんは「魚は嫌い」だと支援者に伝えることができ、常に魚を残していました。しかし、長いつきあいの中でAさんの言動は、常に本心を伝えているのではないと気がつき始めた職員が、ある時魚の骨を取って見たのです。すると彼はその魚を美味しく食べてたのです。つまり彼は魚が嫌いだったのではなく、骨のついた魚が嫌いだったということになります。長い習慣の中で「魚の骨を取って」というような甘えを職員に見せることは彼にはしてはいけないことになっていたのでしょうか。「できることは自分でしなさい」の強要がAさんを長い間苦しめていたのです。それからのAさん、「骨、取ってえ！」とニコニコして叫んでいます。

一方、全くしゃべることができないBさん、長い間、栄養補助食品で命をつないでいます。それは、副食のほとんどを残飯入れに捨ててしまっていて、ろくろく食事が取れないからでした。

残念ながら、先ほど示した通り、話すことができる人に対しては、その方の言動を丸ごと信じてしまう欠点があります。一方で、しゃべることができない人の行動に対しては、常に問題行動等とラベリングをして、ネガティブに評価してしまうという欠点があります。Bさん、捨てることを何年も続けているのに、職員の評価は「また捨てている、困った人だ」に留まっています。思考停止状態の職員の脳みそには「なぜ、捨てているのか？」という疑問形は浮かびません。そこで、とにかく「よく観察すること」という宿題が職員

には出されました。よく観察すると、どうも硬いもの、噛みにくいものの時に、残飯入れに捨てられる量が多いようでした。非常に簡単な支援ではありますが、職員は食事を刻むことにしました。すると、Bさんは、毎食美味しく食べて、栄養補助職員はすぐに必要なくなりました。たったこれだけの観察ですが、観察が支援方法を変えたのです。

Cさん、普段から良くしゃべる人ではありますが、食堂ではひときわ音量大きくしゃべり続けます。反復的な内容なので、職員にとっては、そのせいで食事時間は大幅に長くはなっているものの、大きな課題にはなっていませんでした。しかし、ここでも重要なのは観察でした。ある職員がメニューがカレーライスの際にはしゃべる量、音量ともに増すことに気がついたのです。カレーを嫌いという風には感じなかった職員は、カレーとライスとを別盛りにすることを提案しました。この試みは大成功でした。その後、丼物全てが別盛りになり、同じようにしゃべる量と音量が観察の指標になり、嫌いな食材も明らかになってきました。気がついたら彼の食事は静寂の中で進行するようになっていました。

さて、Dさん、朝食に限って立ち上がって食べる時間があります。妙な行動とは言え、他の食事時間ではそのような行動が見られないので、職員には「座って下さい」といつも声をかけられています。さあ、観察です。するとパンを食べる時にだけ立ち上がることが発見されたのです。さらにその食べ方は、顎を上にあげ一気に飲み込むような姿勢であることも報告されました。それは「鳥が水を飲むような格好」なのでした。さっそくパンは刻まれました。彼はその日から座ってパンを食べることができるようになりました。パンは呑み込み辛かったんですね。

さて、観察力パワーいかがですか？

ラベリングの災禍、俵万智さんの短歌を紹介して筆をおきます。

何となく わかったような気になって
「登校拒否」と その子と呼べり

